

場させてはいけないよ、もつと後の幕に出すべきだ」とS君が、中島氏の近作の戯曲を酷評するのである。すると中島氏はムツとして、例の低い声でこれに応酬する。こういった論争が夜床に入つた時まで続くのである。夜中でも二人は枕を並べて尽きることのない文学論争に花を咲かせたものである。この仲が悪いようで仲のよかつた奇妙な関係は文科学生たちの間ではほほえましい逸話となつていた。中島氏は友達に対し実に誠実で親切な学生であつた。氏は浪漫派の詩人の作品を根気よく読んでいたが、解釈で満足する読み方ではなかつた。自己の創作の体験からして、詩人の創作心理程まで深く掘り下げねば気がすまないという風であつた。英詩というものはつくづくむつかしいものと思う。外国人であるわれわれが果してどの辺まで味わい得るものか、その限度を思う度に私など悲観せざるを得ない。教師として学生に教える講義のために、インフォメーションを集めることはさして困難ではないが、いくらインフォメーションを積んだからとて詩の本質をつかんだとはいえない。一篇の詩についていくら論をつくしても、その詩の本尊をとらえているとはかぎらない。じみな中島教授は所謂論文なるものを派手に発表する型の人ではなかつた。私も教授の論文をあまり拝見していない。然し学生時代から詩や短歌の創作に精進してきただけに、教授の詩に対する研究の境地は後年ますます冴え、かつ深く沈潜して、詩心の殿堂の奥深くへ進まれたことは、静かに語る片言隻句からも、容易に想像し得るところであつた。

晩年は不幸にして半ば闘病の生活であつた。しかし苦しい闘病の体験は枯淡高雅な人柄を更に一層美しく磨いたようである。私は時折女子大に出講した帰途など千早のアパートに訪れるのを楽しみとしていた。海岸からの清風をうけて明窓浄几、書齋は塵一つとどめていない。奥様と御二人きりの静かな日常がしのばれて羨しいほどであつた。女子大の卒業生代表の弔詞の中に、或時は妹の如く、恋人の如く、と御二人の仲を評したことばがあつたが、御子さんたちが皆成人されて夫婦御二人の生活はまさにその通りであつた。

その日は丁度女子大に出講の日であつたので、私は何も知らずに天神町から門司行きのバスに乗り込んだ。すると下條先生と一緒に、中島さんが亡くなられたのを知っているか、と言われ、余りのことに呆然となつたのであつた。かけつけたなきがらの枕頭にヴァリオラム版のシェイクスピアのソネット2巻の脊文字が静かに光を投げていた。 ●

中島先生の思い出

千々岩好子

私の中島源次先生のお名前を知つたのは、歌誌「台湾」が発刊され、野田廉雄氏のお誘いを受けて入会させて頂いてからであつたから、昭和15年、台北市での事である。歌誌「台湾」は台湾での短歌の総合雑誌の立場をとつていたので、いろいろな系統に属する歌人の名前が見え、丁度歌人の誌上交歓場の様な感があつた。野田さんは「ひのくに」、国川雄

さんは「国民文学」、私は「日本歌人」、その他「多磨」「創作」「短歌人」「山なみ」「心の花」等々に属する多くの人が集っていたが、「アララギ」系の一団だけは最後まで加わらなかつた。歌誌「台湾」の主宰者の抱擁力は、とかく狭く小さくなりやすい歌よみの視野を開き、立場の異なるもの同志といえども更に高い目標にむかつて手をつなぐ事を教えた。この短歌の広場に参加して居られた中島源次先生もまた一方の旗頭であられたのだが、当時私は詳しい事は何も知らなかつた。毎月同人欄に発表される古武士の様な風格ある歌を拝見させて頂いているだけであつた。

昭和18年8月、夫の転任により私は台南市に移住した。ここは日本でいえば京都の様な、古い歴史のある町である。オランダ領有時代の抛城の跡、オランダと鄭成功との古戦場、鄭氏の居城となつた赤嵌楼、[その他由緒ある古い寺廟も多い。鄭成功は「国姓爺合戦」で日本内地でもよく知られている通り、鄭芝竜を父に、日本平戸の田川氏を母にもつた明朝末期の一代の英雄である。内地人にとってはそれだけでも親しみ深いものがあつた。町の並木には鳳凰木の大木が立ちならび、道ゆく人の為にみどりこまやかな蔭をつくり、炎暑の夏ともなればその高い梢に火照の様花をつける。発渾とした台北の町に比べ、さびと落ちつきをもつた詩情ある町、ここが中島先生の本拠地なのであつた。先生は台南一中で英語を教えて居られた。

私方では入居するべき官舎が空いていなかつた為に、台南駅に近い州庁の官舎に一まず落つた。ここがはからずも中島先生のお宅と目と鼻の距離であつた。夫の勤め先関係のところへ挨拶廻りをした日の夜、はじめて先生のお宅へお伺いした。先生とも奥様ともこの時が初対面であつた。

先生の書齋は国文学が御専門かと思われるほどその方面の書籍がうづ高く積まれて居り、中でも人麿や赤人、左千夫などについて書かれた部厚い歌書が目立っていた。先生が「ガジュマル」という歌誌を主宰して後進の指導をして居られる事はこの時に知つた。尚、ガジュマルとは「榕樹」の事である。年経たものは幾抱えもある大木となり、枝から髭の様な気根を下げることもある。台湾の風物の特異性を短歌の中に育て上げて行きたいとの希いが「ガジュマル」という歌誌の名の中にこめられていたのではあるまいか、と私は解釈している。

2、3ヶ月たつて夫の勤め先の官舎が空いたので、私共はそちらへ移つて行つたが、いつからともなく先生のおすすめで私もガジュマルに歌稿を出す様になり、時には初心者の方の欄の歌評を書かされたりもした。戦局もいよいよおしつまつた頃の事とて、用紙のこと、印刷のこと、内容などについて随分御苦労が多かつた事と思う。

私は昭和15年に夫について台湾東南方洋上にある紅頭嶼という小さい珍しい島に旅行した事がある。動植物学的にも、土俗民族学的にも貴重な資料が多いといわれ、ヤミ族という蕃人だけの住んでいるこの島は、めつたに行くことも出来ない所なので、どうかしてこの見聞を残しておきたいと思つて、旅行当時の日記を整理して「紀行紅頭嶼」というのを書き、先生にお願いして「ガジュマル」に掲載して頂いた。ところが、五回ほどつづいていただろうか、戦局のけわしい時に軍事上の要点ともなり得る大平洋上の孤島の様子を明

らかにする記事は、軍の御覚えめでたからずとあつて、ついに取りやめになり、完結までに到らなかつたという様なこともあつた。

公務をお持ちの先生の「ガジュマル」のお仕事を、おやさしい奥様はよく扶けられていた。いよいよ人手さえも思うに任せない頃になつてからは、出来上つた「ガジュマル」を印刷所からお宅まで奥様が抱えて運ばれたりもされていた。子育ての様な情を御夫妻で注いで居られたことを今にして身に泌みて思うのである。

昭和19年10月半ば、台湾沖航空戦の時台南でははじめて内陸がグラマン機に襲われた。その空襲警報の出ている時に出産した私は、産後にマラリヤと腎臓炎をおこして、1ヶ月余り台南病院に入院した。私の病室の近くに、この航空戦の時防空壕で爆弾の破片を脚部にうけた台南一中の学徒兵が入院していた。私の附添婦の話では、その生徒の片脚はすでに感覚はなく、足先の方にはウヂのわく始末なので、ついには切断してしまつたのであるが、1本の脚がなくなつてしまつてという事を、寝たままで動けない本人はまだ知らないのだとのことであつた。この生徒を見舞われた中島先生は、私の部屋にもお寄り下さりお見舞下さつたのであるが、このいたましい教え子のため深く心を痛めて居られたことを今も忘れない。

戦争中は家庭菜園がはやつて、うちでも裏庭にしやくし菜、トマト、さつまいも、ふだん草、ほうれん草など作つたが、皆よく出来た。奥様から、先生はふだん草の白和えがお好きだとお聞きした事があつたので、この葉を1、2回お届けした様に思う。

いつの間にか「台湾」も「ガジュマル」も、又内地からの「日本歌人」も出ない様になつて終戦を迎えた。

国民政府がやつて来てからも、私方では留用になつてしばらく残つたが、一般の引揚げはあわただしく行われたので、中島先生の御一家が何時何処へお帰りになられたか知らなかつた。

昭和27年、夫の勤務地が福岡に移り、当時はまだ市外であつた香住ヶ丘に住む様になつた。29年頃ひよつこり尋ねて来られた野田廉雄老から、中島先生が県立女子大英文科の教授をして居られるとお聞きし、私は早速学校に先生をおたづねした。それから時には先生お1人で、又ある時は奥様と御一緒に私宅に遊びにおいで下さつた。その頃は下原の方の農家の離れを借りてお住まいの由であつたが、香住ヶ丘あたりによい所はないだろうかとのことなので、私は心当りをさがしてみたけれどなかなか適当なところがみつからなかつた。そのうちに千早に新しくアパートが建ち、そちらへ越して行かれた。

たしか、昭和30年のことだつたと思う。近いうちに奥様と御一緒にあさを掘りにおいで下さる旨のおはがきを頂いたので、暦で潮加減のよい日時をしらべてお知らせしようと思つているうちに、次々と目の前におこつて来る雑事について取りまぎれ、お返事をさし上げるのを忘れてしまつた。

その年は私にとつては大変多事な年で、否応なしに隣組の世話、子供の通つていた中学校の役員、私の卒業した台北の女学校の同窓会の世話などがおしかぶさつて来、おまけに海辺に新築した家の宣伝が漸く利いて来て、一夏の間親類や友人など、延べ人数にして

40数人に上る泊り客があつた。私はただもう目の前のことをさばく事のみで夢中で、先生のおはがきの事を忘れて行つた。

1、2ヶ月すぎてある時はつと思ひ出した。ああ、申し訳ない失礼をしてしまつたとはがきを急いでさがしたが、その時はすぐに見つからなかつた。千早のアパートの番号を覚えていながつたので、そのうちにはがきが見つかつたらお詫びを兼ねて御案内のお手紙をさし上げよう、と思つているうちに、又目の前の雑事に追われてまぎれて行つた。

この頃から私の歌のノートも空白のままである。家妻の私は年末、年始のあわただしさの中でここ数年というもの、自分の年賀状を年末のうちに書いて出したことがない。いつも正月がすんで子供達の学校も始まつて、やつと一息つける10日頃になつてから、私宛に来た年賀状に返事を出すのがせい一杯であつた。そしてここ数年私が先生に年賀状をさし上げていながつたのは、先生からも頂いていながつた事を意味する。どうやら先生は私の失礼にお気を悪くされていたものの様である。それを思うと、故なくして先生のお気を傷つけた事が申し訳なく、気になつて仕方がなかつた。遠慮深く、礼儀正しい先生は、私が御案内さし上げなかつたのでそのままおいで下さらなかつたのだ、返事など待たずにおしかけて来て下さつていたら、私が斯うも長いこと心を痛めずにすんだであらうに——と、考えるのであつた。

今更言いわけめいた手紙をさし上げるのも気がひけるし、釈明のためにお伺いするのもおかしいが、そのうち何時か私からおたずねし、又先生にも奥様と御一しよに遊びに来て頂こう、先生がお好きだと言つて居られた多肉、観菜などの植物も新しくこしらえた温室に大分集つたから見て頂こう、きつと喜んで下さるだろう、株分けして先生にもさし上げてアパートの窓辺に並べて頂こう、等と思ひ思ひしていた。

今年の夏、突然中島先生が亡くなられたとお聞きした時、もう取り返しがつかないことになつてしまつた、申しわけなかつた、と心に重いものがおしかぶさつて来るのを払いのける事が出来なかつた。

その頃、うちの庭にグラジオラスの花が咲いていた。この花を持つて奥様をおたずねし先生の御霊前にお供えして頂こうと思つていると来客があつたり、他に用事が出来たりして出かけられなくなる。今日は出かけられそうだと思つていると丁度美しかつた花は少し過ぎ、もう2、3日待てば次のが咲き揃つて具合よく切り花に出来る様になる、そのうち又来客といつた有様で、おたずね出来ずにいるうちに奥様は御郷里にお帰りになられた様であつた。

先生がこの世に在られるならば、又奥様が近い所にお住いならば機会も有るものを、先生は亡くなられ、奥様も福岡を去られた今となつては全く救いの道が断たれたも同然である。

そこへ此の度先生の歌集刊行の企がおこつていることを知らされ、お手つだいの一端をさせて頂けたのは、私にとつては唯一の救いであつた。いくらかでもお役に立てば、先生はきつとあの世からでもおゆるし下さるであらうと。

引揚げにより、以前の歌全部を失れわているのは何としても残念でならない。今度拝見

させて頂いたのは終戦直前から、引揚げ後亡くなられるまでの千数百首で、多いとは言えない。が、年代順にこれらの歌をよませて頂くと、私の知らない間にも先生は御病気で入院されたり、御郷里で保養されたりしている。知らなかつたとは言え、御病床を一度もお見舞申し上げなかつたのも、この上なく残念に思う。

御郷里の芦刈村の風物や、福岡市香椎近郊を歌われているものには、特にしみじみした共感が湧き、忘れていた歌心をよびさまされる思いであつた。もう10年、20年生き永らえて、後進の指導をして頂きたかつた。出来ることなら「ガジュマル」に代るものを再び育て上げて頂きたいと思つていただけに、先生の御逝去が惜しまれてならない。

思えば細々とした地味なおつき合いであつた。決して短いとはいえない歳月をとおして、その底から浮かび上つて来るのは誠実、真摯な、燻し銀の様な中島先生のお人柄である。

中島さんのこと

森 岡 栄

中島さんが亡くなつたことを聞いた時はガックリ来た。前に笹月清美さんの亡くなつた時も、コリヤイカンと思つたが、今度はもつと身近かであつた。

中島さんと私のおつき合いはアッサリしたものであつた。

台北に赴任した昭和18年の年の暮れに台南方面へ単身旅行した折、当時台南一中で教えておられた中島さんを訪問したのが始まりである。たしかお宅は北門町とか言う所にあつて、お会いした部屋は、蔵書のうずたかい書齋であつた。この時にどんなことを伺つたか全く記憶していない。中島さんは私の訪問それ自体も忘れてしまつておいでであつた。

2回目にお眼にかかつたのは佐賀市の郊外の芦刈村の御自宅であつた。戦後で、殆んど旧制高校、専門学校が新制大学に昇格した年の夏である。

福岡女子大学は1年おくれてスタートしたので、その頃はまだ女専であつた。九州では熊本女専、別府女専が既に4年制女子大に昇格していた。

その年の8月は女大昇格に関して実にあわただしい、そして色んなことの起つた月である。たまたま女子大学の為の新らしいスタッフの英文学関係の先生を何人か御願ひする用件で、当時九大英文科の主任教授の中山竹二郎先生のところに伺つた時、引揚げ後佐賀市で教えておられた中島さんの話しが出て、下條先生の御諒解を得たその足で芦刈村に行つたのである。

中島さんは割合早く承知して下さつたのであるが、奥様が仲々頑強で、もうジイちゃんだから、とか何とか言つて御主人をお離しになりたがらない御様子であつた。が結局奥様からもOKを頂いたのであつた。その折御馳走になつた銀メシの味は忘れられない。貧窮時代であつた。